

チェコの小型犬プラシュスキー・クリサジーク

チェコ共和国原産の小型犬プラシュスキー・クリサジークをチェコと協力してブリードしているPKJ

プラシュスキー・クリサジーク・クラブ・オブ・ジャパンのブログ

秋田犬とクリサジーク

2018.03.15 Thursday

冬季オリンピック。

フィギアスケートの

[ザギトワ選手](#)が

良い成績のご褒美に

「秋田犬(あきたいぬ)」を

プレゼントしてもらおう約束を

ご両親となさって

[秋田犬保存会](#)の仔犬を

待ってらっしゃるとか。



日本で秋田犬といえば、
「わさお」が有名ですが、
クリサジークの原産国である
チェコ共和国でも、秋田犬は
とても有名で人気があります。

そこには、
クリサジークが日本に来る前の、
はじめての物語...が関係してるんですよ。

一夜にして
ナチスに滅ぼされた
チェコの村の跡地に

当時、暮らしていた子供達の
彫像を建てる...という平和を願う
ボランティア活動が、世界規模で開催され、
それに参加していた PKJ 前代表のご尊父
(彫刻家)が、愛犬家である
主催者ご夫妻と意気投合。

「日本の秋田犬は素晴らしいですね」



との言葉に、実は秋田県にアトリエを
構えていたご尊父は、帰国後、2頭の
秋田犬をご夫妻にプレゼントしました。

感激なされたご夫妻が、お返しに...と
贈ってくれたのが、2頭のクリサジーク
だったのです。



その愛らしさに魅せられた
PKJ 前代表が、家族で2年間
チェコに滞在した際、クラブに所属し、
ドッグショーに出陳したりブリーダーに
師事して犬種を学び、帰国後、日本で初めて
クリサジークのブリーディングに
着手しました。

FCI 未公認犬種のため、チェコの規約に則った
厳しい条件下でのブリーディングです。

平和を願う活動と
日本とチェコの芸術家の友情が
クリサジークを日本に運んで
くれました。

クリサジークは、
だから、
平和を愛する気持ちを
体現するワンコのように
思えます。



そして、チェコでは
秋田犬がブリーディングされ、
5月の秋田犬保存会の
展覧会に何度もチェコの方が
お見えになっています。

アテンドは、現 PKJ 代表。

最初の友情が、
時を経て、代替わりしてからも、
ずっと続いているんですね。
平和を願う気持ちゆえ...でしょうか。



PKJ はチェコのクリサジーク・クラブに貢献しています

2017.11.08 Wednesday

10月10日、
PKJは**14周年**を迎えました。

PKJが組織化される前は
チェコ生まれの親犬から
生まれた仔犬には、チェコから
血統書が出ましたが、その仔犬が
成犬になった際、親になれる
可能性はありませんでした。



ボニタツェの審査員が
日本にいなかったからです。

ボニタツェとは、
クリサジークが成犬になった際、
交配して子孫を残せる犬かどうかを
調べる検査で、スタンダードの体格か
歩様や性格はどうか等を審査します。

合格すれば、繁殖の倫理規定に
従って交配が可能となるのですが、
当時、ボニタツェを受ける事が
出来るのはチェコ国内だけでした。



が、2003年、
チェコへ出向いた際、PKJは、
クリサジーク復興の生みの親である
故フィンデンス氏から直接、指導を受け、
試験に合格し、チェコ人以外で初めて
審査員の資格を得、日本国内での
繁殖が許可されました。

それから数年は、
クリサジークの審査員が居る国は
チェコと日本の2国だけでした。

時は流れ、
チェコのクリサジーク・クラブが
FCI 公認犬種目指して、規則等を
変更し、組織を変化させていった
ことに伴い、PKJも少しずつ
変化して来ました。



クリサジークが FCI に
犬種として認められるためには

繁殖における倫理規約を厳守し、
長期間、犬種を向上させながら
スタンダードを安定させると同時に
頭数も増やさねばなりません。

PKJ は、ポニタツェを行い、
厳しい管理規約・倫理規定を
守りながら犬種の向上、そして
日本でクリサジークを広めることで
チェコのクリサジーク・クラブに
貢献しています。

すてきなドッグショー 2

2010.04.20 Tuesday

先日、チェコのドッグショーの様子をご紹介しましたが、その続き。



ほぼ一日かけてのクリサジークだらけのショーでしたが
この日のタイトルは
「敬愛するヤン・フィンデース氏を偲ぶドッグショー」

以前このブログでもご紹介しましたが、ヤン・フィンデース氏とはチェコの有名な犬学の博士、クリサ
みの親、PK クラブの名誉会長、そして日本にPKJ を作って下さった恩師です。
残念ながら彼が亡くなってもう数年が経ちました。



クリサジークのスタンダードを作った時も、
クラブを立ち上げた時も中心人物だった彼。
そのフィンデースさんの功績をたたえ、
そして彼のあのクリサジークを愛した優しいまなざしを偲んでのドッグショー。

まるでまた彼に会えたような温かな気持ちになったのは私だけではなかったようです。
フィンデースさんの名前が出るたびに皆やさしい表情で彼を懐かしく思い出していました。

ショーのジャッジは何度か冗談混じりに
「フィンデースさんなら〇〇と言ったはずよ。」
とか、
「フィンデースさんがいたら、今のクリサジークに満足するかしら。」
と私に顔を向けました。

本当だ、私も同じことを繰り返し考えながらドッグショーを見学していました。
あの大きくて温かな手でいとおしそうにクリサジークを抱く姿を思い出しながら。



すてきなドッグショー

2010.02.16 Tuesday

チェコのドッグショーの風景をひとつ。

ショーには
インターナショナルもあれば全国大会、地方大会、
それから単犬種のものまで規模も内容も様々だが、
この写真のショーは PK クラブ主催の「クリサジーク・デー」と題する
イベントの一コマとしてプラハ郊外のキャンプ場で行われました。

クラブ主催なので出場するのはもちろんクリサジークだけ。
そのかわり、若犬から成犬、老犬(牡犬?)の部、
子供がハンドリングを競う部まであり、50 頭以上のクリサジークが集まりました。

会員は週末の 2 日間、写真後方に見えるような小さなコテージに宿泊したり、

テントを張ったり、日帰りドライブだったりと様々な形で参加します。
ショーの他にボニタツェという繁殖犬の許可をもらう検査や
交流会など様々なイベントがありました。



フェスティバルの一環なので、正装してというようなショーではなく、
夏らしいカジュアルな服装で皆さん自慢の愛犬と参加されていました。
例えて言うなら、子供の運動会に家族全員で参加を楽しむ、
そんなアットホームな雰囲気です。

こんなショーが私は好きです。
ほのぼのとした空気が漂いますが、
これがみなさん結構(というか、かなり)真剣だったりもするんです。

クリサジークより背の高い金色に輝くトロフィー目指し、
皆さんにこやかな中にも真剣さの感じられるショーでした。

この日の私の目的はジャッジについての勉強でした。
初夏、抜けるような青空の下、喉もカラカラです。
「冷たいものでも飲んで休憩しましょう。」ということになり、
大きな柳の木陰に移動。
そこに運ばれてきたのは大きなカップの冷たいビール。
「えーっ、昼間からビール!？」
なんてチェコでは誰もいません。

こんなショーが私はやっぱり大好きです。



未公認犬種とドッグショー

2010.02.01 Monday

クリサジークは

FCI未公認犬種なので国内のドッグショーに参加することができない。

なぜなら、国内最大の全犬種団体はFCI公認犬種をその対象にしているからだ。

未公認犬種って？

日本ではあまり聞きなれない言葉だが、

世界にはたくさんの未公認犬種がある。

そのどの犬種も

繁殖家やクラブが新犬種として登録されるべく努力を続けており、

それによってわずかだが現在も新しい公認犬種は生まれ続けているのだ。

クリサジークが登録されているチェコのケンネルクラブも

日本と同じFCI(世界畜犬連盟)の傘下であり、

チェコでも毎年インターナショナルドッグショー含め全国で幾つものショーが開催されている。

そして、その全てにクリサジークが参加している。

どうしてだろう？

日本と違うのは、どのドッグショーにも未公認犬種枠があるということ。

公認されるべく努力をしている犬種であれば

公認犬種となんら変わらない条件でショーに参加することができるのだ。

これはヨーロッパでは普通のことらしい。

インターナショナルドッグショーともなれば二桁台の未公認犬種が参加していて、初めて目にする犬種もたくさんでそれはそれは興味深い。

新犬種を作り上げていくためにはドッグショーへ参加してジャッジしてもらう事が必要不可欠なのである。



チェコで繁殖犬になるためにはボニタツェという検査に合格しなくてはならないが、その検査を受ける前に最低一度はドッグショーに出て評価をもらっておく必要があった。

私がチェコで愛犬のティナとショーに参加したとき、総合的にはとても素晴らしい評価をいただいたが、その中には「やる気がない」というあまりよろしくない評も書かれていた。

そう、そのとおり、彼女は全くドッグショーがお気に召さなかった。飼い主共々初めてということもあったが、田舎で暮らしていた私たちは散歩の時もノーリードだったので、にわか練習でリードを付けられて、ティナにはちっとも楽しくなかったのだ。

これは飼い主の準備不足がおおきな原因。リンクを丸く歩く時もやる気なさが、嫌々感丸出しだった。

車中は

2008.06.04 Wednesday

恩師の話が続いたので、最後にもうひとつ。お二人との楽しい思い出のシーン。

Sさんはプラハと地方の両方家をお持ちで、良い季節にはクリサジークたちのために、なるべく田舎の家で過ごすことにしているそうだ。

お会いするために私がオーストリア国境近くのその町まで会いに行くこともあるし、彼女が車を運転してプラハまで帰ってきてくれることもある。

あるとき、「田舎の家から今帰ってきた。」と言う彼女の車の中を見て皆が驚いた。クレートから次々とクリサジークが出てくる。

そう大きくはない車に全部で10頭は、いたんだな...。それから、ミニピンのおばあさんもいるし、後ろには鳥かごに入ったあの小鳥まで積んでいる...。

その日はお元気だったフィンデースさんも来てくださっての、私のための勉強会だった。

さて、充実した時間はあっという間に過ぎ、お別れの時。Sさんがフィンデースさんを送っていくと言う。乗るところあるのかな？と、皆が心配している中、

次々とクリサジークが入ったクレートが車の中に納まってゆく。
で、フィンデースさんは？

彼女はおもむろに
「ここに座ってください。」と助手席を指した。

確かにそこがいいだろう、そこしかないよね、と思うものの、
足元にはミニピンのおばあさんが寝ている。
ややこしそうに乗り込もうとする重鎮。

間髪いれず
「気をつけて！そーっとね。大事な子が寝ていますから。」
「彼女は年寄りです。気をつけて、気をつけて！」

フィンデースさんだって十分お年寄りだと思っただけど……。
そんな重鎮も
「そうだね、君はおばあちゃんだねえ。はいはい。」
と、足元のミニピンに微笑みながら上手にまたいで乗り込んでいる。
ああ、あんな偉い方が……と思ったのは私だけ？

そして
「君と一緒に嬉しいよ。」
と言う仕草をしながらこちらを笑顔で振り返った。
なんて素敵な方なんだろう。

白髪顔の老犬を白髪のフィンデースさんがいたわりながら、にこやかに走り去るあのお姿が忘れら

彼女の能力

2008.05.30 Friday

前回ご紹介した私の恩師、Sさん。
長い間、すばらしい犬を世に送り出し続けており、
大変有名な繁殖家のお一人だ。
私は彼女をととても尊敬している。

ブリーディングのセンスはすばらしいものがあるが、
その根底にある彼女の生き物に対する深い慈しみの心もこれまたすばらしい。
彼女は命を育む天才でもある。

彼女の田舎の家では、10頭のクリサジークたちが庭の木々の間を走りぬけ、
土を掘り、泥んこになって楽しく暮らしている。

草をムシャムシャ食べて、まさに野生児！
これが本当の姿なんだろうな、と思ったものだ。

老犬もいれば、子犬もいる。
ところどころに用意された快適なベッドにも
彼女の細やかな愛情が見受けられた。

疲れるとみんなそれぞれ快適な場所を見つけてくつろいでいた。
彼女が一声呼べば、いたるところからクリサジークたちが「なに、なに!？」
と嬉しそうに集まってくる。
みんな心から彼女が好きなのだ。

彼女の家には鳥や亀やモルモットなど小動物も飼われていて、
それら動物はすべて、幸せそうな表情をしているし、
心穏やかに暮らしている様子が伺える。

家の石壁に取り付けてある小さなかごの中には地味な小鳥が一羽。
夕方になると厚手の毛布の切れ端をそっとカゴに掛けながら、
小鳥に何か話しかけている姿。

我が家が家族で日本に引き上げるとき、
息子が飼っていたモルモットをSさんに託した。
置いて行くのを渋った息子もSさんにならお願いしてもいい、と言って。

モルモットは大人の両手に乗るくらいのネズミの一種で
日本では実験動物として有名だが、
本当はとて素晴らしいペットになる。

チェコでは小さな子供が動物を飼いたいと言い出したときに、
まず親が与えるのがモルモットなんだそうだ。

子供でも扱いやすいサイズと、おとなしい性格、
動きもそう早くないし、寝床とトイレを分けて生活するきれい好き。

人にもよく慣れて、ご飯が欲しかったり、寂しいと人を呼んだりもする。

さて、「モルチェ」と我が息子が名づけられたそのモルモットはその後、彼女のキッチンで長寿を全う

亡くなった時には、残念そうにそれまでのモルチェの生活を細かに話してくれた。
大変なついたそうで、声を出して会話を楽しんだという。

どうしてキッチンにいたのか？という問いに
「あの子は干草よりきゅうりが好きだったのよ。
私がきゅうりを切りはじめると鳴いて呼ぶものだから、
私のきゅうりはいつも半分に減ったのよ。」
と話してくれた。

いつも目の届くところで育ててくれたと言う事だろう。

「連れて帰ればよかった。」と後悔していた息子だが、
私がチェコへ行くたびSさんからモルチェの話聞いて来て話すので、

息子は遠くを見つめながら真顔で聞き入り、
「幸せそうでよかったね。」と言うと、決まって嬉しそうにうなずいていた。

モルチェ亡き後、
彼女はまた2頭の変った毛並みのモルモットを飼っていた。

「モルチェを飼ってからモルモットが好きになったわ。」
と見せてくれた彼らはきれいな干草の中において、
庭から採ってきたばかりの小さなりんごをもらうと、
前足で抱えるようにしながら、覗き込んでいる私を見上げて、
「もらったんだよ、いいでしょ！」
と言わんばかりの笑顔になった。

モルモットが笑うのか？と思われる方もいらっしゃるだろうが、
このとき確かに彼らは笑っていた。

クリサジークと関係ないことをいろいろと書いたが、
彼女がすばらしいブリーダーであり得るのは、
「私は犬が好き。とか、クリサジークが好き。」
の前に、生き物に対する無限の慈しみの心が彼女にはあるから。
なんか、そういうことなんじゃないか、と思うのである。

理屈だけでは成し得ない、
彼女のすばらしいブリーディングの成果は、そういうところから生まれるのではないか。
学者さんでもかなわない、天性のものを感じるのである。



どうですか！ドッグショーに革のサンダル履きで登場するあたり、さすが貫禄です。
前を歩くクリサジークはこんな小さな写真でも、すばらしいのが良くわかるでしょ。



もう一人の恩師 その1

2008.03.14 Friday

私のもう一人の恩師、Sさん。
大変有名な繁殖家のお一人で、PKクラブの役員もされている。
私の初めてのクリサジークは彼女の元で生まれた。
それ以来のお付き合い。

彼女は今まで数々のすばらしいクリサジークを生み出し続けていて、
その姿はたくさんのメダルとともに専門書でも見ることができるくらいだ。
「美しいな」と思うクリサジークの血統証を開くと
必ず彼女の繁殖した有名な犬の名を見つけることができる。

美しいクリサジークをあれだけ生み出す事ができるのは、
センスなのだろうか。

もちろん、彼女にはクリサジークの前には
ピンシャーをブリーディングしてきたという長い歴史もあるのだが。
それにしても、彼女はある意味天才だと思う。

命を育む天性、懐の大きさ、深さをいつも感じるのだ。
繁殖に対しての考え方も、上っ面ではない確かなものを感じて、
その洞察力と生命に対する愛情の深さに驚かされる。

その深い言葉に胸の奥を揺さぶられるような気持ちになることが多々ある。
私は彼女を心から尊敬している。



彼女にアドバイスいただく時、私は一語一句逃さないよう神経を集中している。
凡才の私は彼女の言葉を絶対に聞き逃したくないのだ。

初めてのクリサジークをお願いしていた当時、
彼女は日本人にクリサジークを譲る事になって、相当心配だったらしい。
言葉の通じない家族だし、その家には小さな子(2歳)と大型犬がいたし。

面と向かって

「この大型犬は小動物を襲うんじゃないか？」

「クリサジークの天敵は小さな子供です。」

と言われた。

我が家のラブラドルに心配はなかったが、
子供の方は小型犬と暮らした経験がなかったので、
「大丈夫です。」とは言えなかった。

私たちは彼女の心配が理解できたし、
貴重なクリサジークを譲っていただけるだけでありがたいと思っていたから、
いつまでも待つことを伝え、
結局彼女が2頭のクリサジークを連れて我が家にやってきたのは
子犬が生後6ヶ月と10ヶ月を過ぎた頃だった。

新しい家庭の状況を見ながら譲る犬や時期を決めるのは当然のこと。
繁殖者のそういう気持ちをストレートに伝えてくれたのも彼女だった。

それに、何よりも彼女の元で生まれるクリサジークたちはとても美しい。
そんな天才が生み出すクリサジークはクリサジーク界の宝だとおもう。
クリサジークのこれからを希望あるものにしてきているのだから。

その大切な宝を次の世代へとつなげる、それが私たちの役目です。
が、
ん～!!それがとっても難しい!
ブリーディングでは予想通りの結果ばかり出るとは限りません。
一喜一憂、試行錯誤の繰り返しです。

何か解決しがたいことが起こると、
Sさんに会ってたくさん話を聞いて欲しい衝動に駆られます。
彼女なら、なんて言うか?どんな答えが返ってくるか?

今年もSさんはじめクラブの皆さんにご指導いただくため
チェコに行って来ます。

今は、メールと言うすばらしいものがあるけれど、
やっぱり直接お顔を見て話さないと伝わらない大切なものもありますね。

日本のクリサジークたちのご報告と、山盛りの事務処理と、山盛りの相談事を抱えて。

余談ですが...

恩師Sさんの暮らしぶりを拝見していると、
犬に限らず命を育む才能に驚かされることがあります。
たくさん動物に囲まれて生活している彼女。
その生き物すべてが幸せそうに生き生きとしているのです。
彼女の家には庭で採れた新鮮なりんごをもらい、

両手で抱えた瞬間に私の顔を見上げ、うれしそうに笑う(ように見えた)モルモットがいました。
そんなお話はまた次回。

恩師

2008.03.12 Wednesday

写真中央が故ヤン・フィンデース氏。
犬の学者である彼は永年PKクラブの会長だった。
クリサジークが犬種として確立された当時、ブリーディングの核を作られた方で、
初代スタンダードも彼によるもの。
他にも数犬種の専門家、チェコの犬の世界では重鎮でいらした。

写真当日のドッグショーでは審査員やボニタツェ検査員のお仕事が忙しく、
広い会場をあちらこちら探してもなかなかお会いすることができなかった。



ようやくの再会を喜び合った後のワンショット。
残念ながら3年前に他界され、これがお会いした最後の日となってしまった。

私の恩師。
彼がいなければ今のPKJはなかった、というくらい。
とっても感謝しています。

フィンデース氏はいつも私を暖かな笑顔で迎えてくださり、
大きな身振り手振りでクリサジークについて教えてくださいました。
その姿を見れば、誰よりもクリサジークを愛している方だとすぐに分かったし、
彼のいうことはいつも正しかった。

現在PKクラブは新しい会長のもと、さらなる発展に向けて活動しています。
その後、繁殖家たちは系統立てたいいくつかのグループに分かれ、
新たなシステムによるブリーディングを開始しました。

現在も頼れる指導者を中心に繁殖家たちは活動を続けているわけですが、
何かに迷った時、私はフィンデース氏の言葉を思い出します。

基本を崩してはいけない、あわててはいけない。
誰よりもクリサジークを愛してやまなかった彼の言葉です。

日本でクリサジークは 80 頭にも増えました。
あなたの愛したクリサジークはここでも大変愛されています。

私はあなたがあの大きく暖かな両手で愛おしそうにクリサジークを抱く姿を忘れないでしょう。

どうぞ、天から見守っててくださいね。
なんて、言わなくてもきっとハラハラしながら両手を差しのべてくださっているんでしょうね。

カナダにも

2008.03.05 Wednesday

チェコからうれしい報告がありました。
チェコ公式クリサジーククラブ(PKクラブ)は
日本のPKJの活動と質の高いブリーディングを大変高く評価し、
その成功を元に、カナダ、デンマーク、スウェーデンにも支部を設立しました！

世界中でこの小さなエンジェル達が愛され、広がってゆく...
その足掛かりとなったPKJ。
しみじみ、うれしいです。

ご存じのとおり、PKJはPKクラブ海外支部第一号です。

派手な活動はできないかもしれないけれど、ハイスピードも期待できないけれど、
成果を自負し、他の支部のお手本となるよう、
これからも一步一步、確実に歩んでいきたいと思えます。

それから、今後も日本国内唯一のクリサジーク情報発信基地として皆様の
「クリサジークって？」
にお答えしていきます。

ご質問、お問い合わせいつでも待っています！



古くて新しい犬種...その2

2007.05.09 Wednesday

そんな古い歴史を持つクリサジークだが、近代になって犬種として確立するまでは、チェコ人好みの小型犬として各地で存在が確認されてきたに過ぎない。日本で言えば日本犬の一種のようなものだろうか。

古くは王室の愛玩犬でもあったわけだが、その後はもっぱら庶民の家でねずみを退治する仕事を任されていたようだ。そして、もちろんそのチャーミングな性格と容姿は家族として愛されるに十分だった。

クリサジークの固定化に乗り出したのは1922年頃。当時はあらゆる毛色がありサイズにも幅があった。その後、ブリーディングは戦争にも阻まれるが、それでもようやく1982年には犬種として確立するに至る。

今年初めに日本で生まれた子犬の登録番号は2625番、犬種確立からの25年間に2625頭のクリサジークが生まれたということだ。

古い歴史を持った、しかし、とても新しい犬種。

この犬種を愛する人々の努力の結晶が今、私の膝の上でスヤスヤと寝息を立てている。

この子の体重とは裏腹にPKJの責任はずしりと重いのである。



古くて新しい犬種…その1

2007.05.02 Wednesday

チェコ共和国の国犬のひとつとされているクリサジーク。

近代になって復活に尽力されたブリーダー達は、
この犬種がいかに古くから国民に愛されてきたか、
どんなに歴史ある犬種であるかを事あるごとに話してくれる。

8世紀、チェコの王様はフランス王に「これからは仲良くしていきましょう」と、
とても小さく珍しい犬を友好の証としてプレゼントした、だとか、
14世紀には王様が狩猟の友として愛し、そしてブリーディングにも着手、
愛する人たちへのプレゼントとした、だとか。

チェコには遠い昔から多少色や形は違っても
クリサジークの子孫といえる犬がいたことは間違いないようである。

中でもこれは一番好きな話。

14世紀後半、王様であるヴァーツラフ四世は、
夜な夜なプラハ城を抜け出し近くの居酒屋にビールを飲みに出かけたそう。

そんなお忍びの散歩には必ず愛犬のクリサジークがお供したのだとか。

プラハ城のあの広場を、あの坂道を
クリサジークが王様と一緒に歩いたなんて、
何だか想像するだけでワクワクする話ではないか。

子供の頃、グリム童話を読み、空想の世界を楽しんだあの感覚を思い出す。

